

フランスにおける高等法院 (Parlement) の組織と職業階層⁽¹⁾

伊藤 仁

The Organization and the professional hierarchy of the Parlement in France

Hitoshi Ito

はじめに

大評議会(Grand Conseil)は、多くのことが可能であったが、実際は《高等法院の単純な複製》であった。《「王の暦」(L' Almanach royal)の見出しをよく研究した順序では、大評議会が高等法院の前にある》とはいえ。それは諸高等法院とともに検討されうる。高等法院はみな、パリ高等法院にならって創設されていた。高等法院は常にパリ高等法院と一つのまとまりをなすのみなされていた。デュ・チレ(Du Tillet)というパリ高等法院の書記はこう書いている《王は、最高の司法権を持つのみで、王は司法を高等法院に当たらせている。高等法院は様々な管轄の一つを行うに過ぎない。》それらには違いがあるが、互いに似ており、まとめて検討することができる。

部(Chambre)

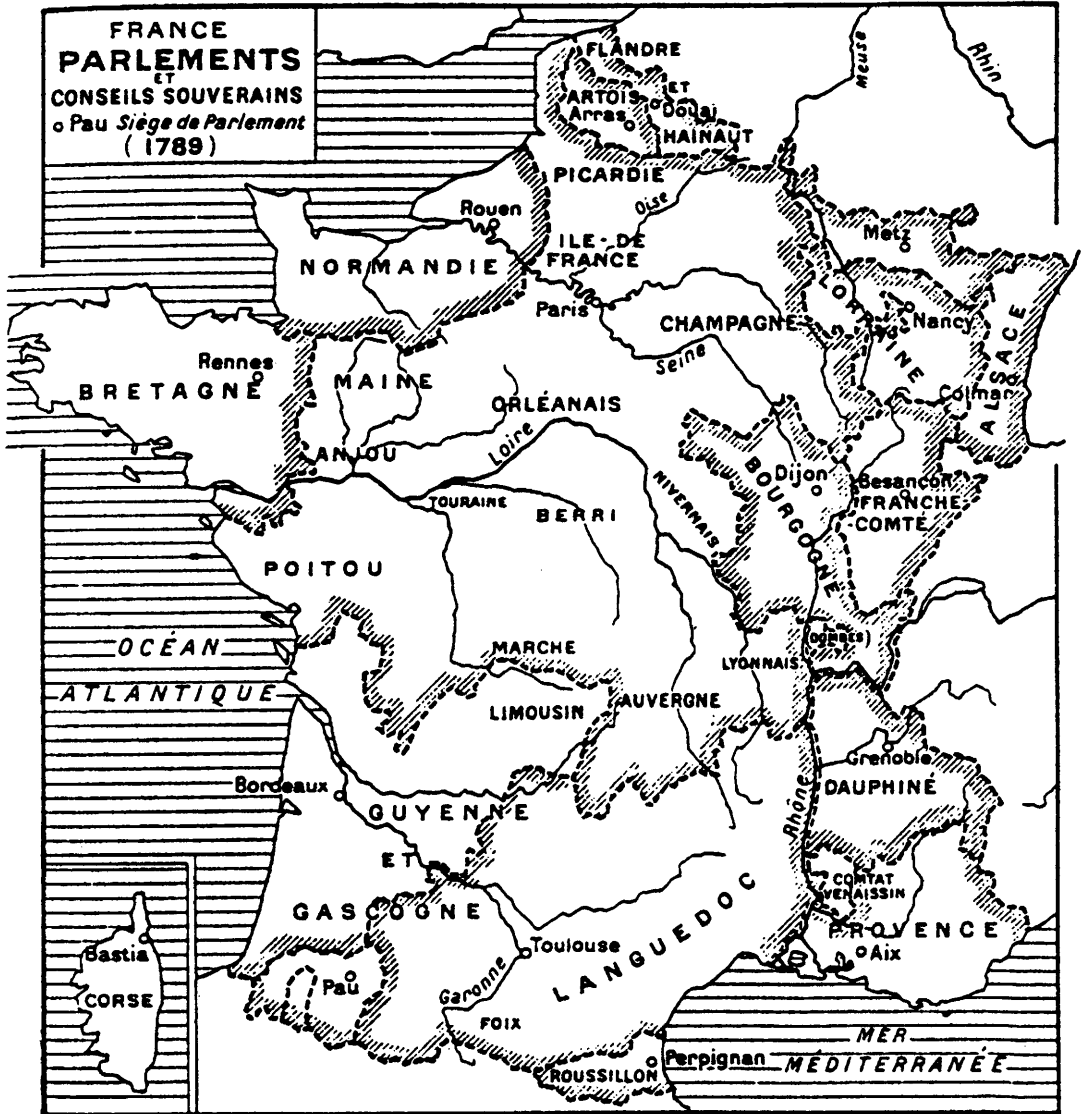
高等法院にはみな、《大審部(Grand-Chambre)》がある。それは、他のすべての部がそこから生じた最初の部であり、各高等法院の最も上位の部である。大審部がもととなり、ほとんど至る部署で手続きの必要性が生じた。刑事法廷(Tournelle criminelle)、時には民事法廷(Tournelle civile)、一もしくは複数の予審部(Chambre des Enquêtes)、一もしくは二の審理部(Chambre des Requêtes)、休暇部、ある場合には新教徒に対する勅令部がそれである。

大審部は直接、王の代理人である法院長(premier président)が主宰する。法院長は委任によってその役職を遂行する。不在の場合代行できるのは大審部部長評定官、刑事部(Tournelle)部長、世俗評定官の最年長者である。1685年頃、パリ高等法院の大審部には、9人の部長評定官、33人の評定官(21人は世俗、12人が聖職者)がおり、これは1756年まで続く。1756年に評定官は37人となる。2人は生まれながらの名誉評定官で、パリ大司教、クリュニー修道院長である。別に6人の委任状による生まれながらの評定官がおり、その職は法服職にのみ授与されるものである。この名誉評定官は、他のすべての評定官にまさって、また掌請官(maître des requêtes)にもまさって、審議を引き受けていた。《4分の1期》すなわち3ヶ月ごとの掌請官は4人おり、彼らは国王顧問会議や騎馬視察の仕事がない時に、投票権と発言権をもって高等法院に出席していた。掌請官は高等法院の部に集まることができ、最年長者が議長となった。

高等学校

王の弁護士が二人、国王代訴人がいる。あるいは次席検事と主席検事で彼らは《検事》である。

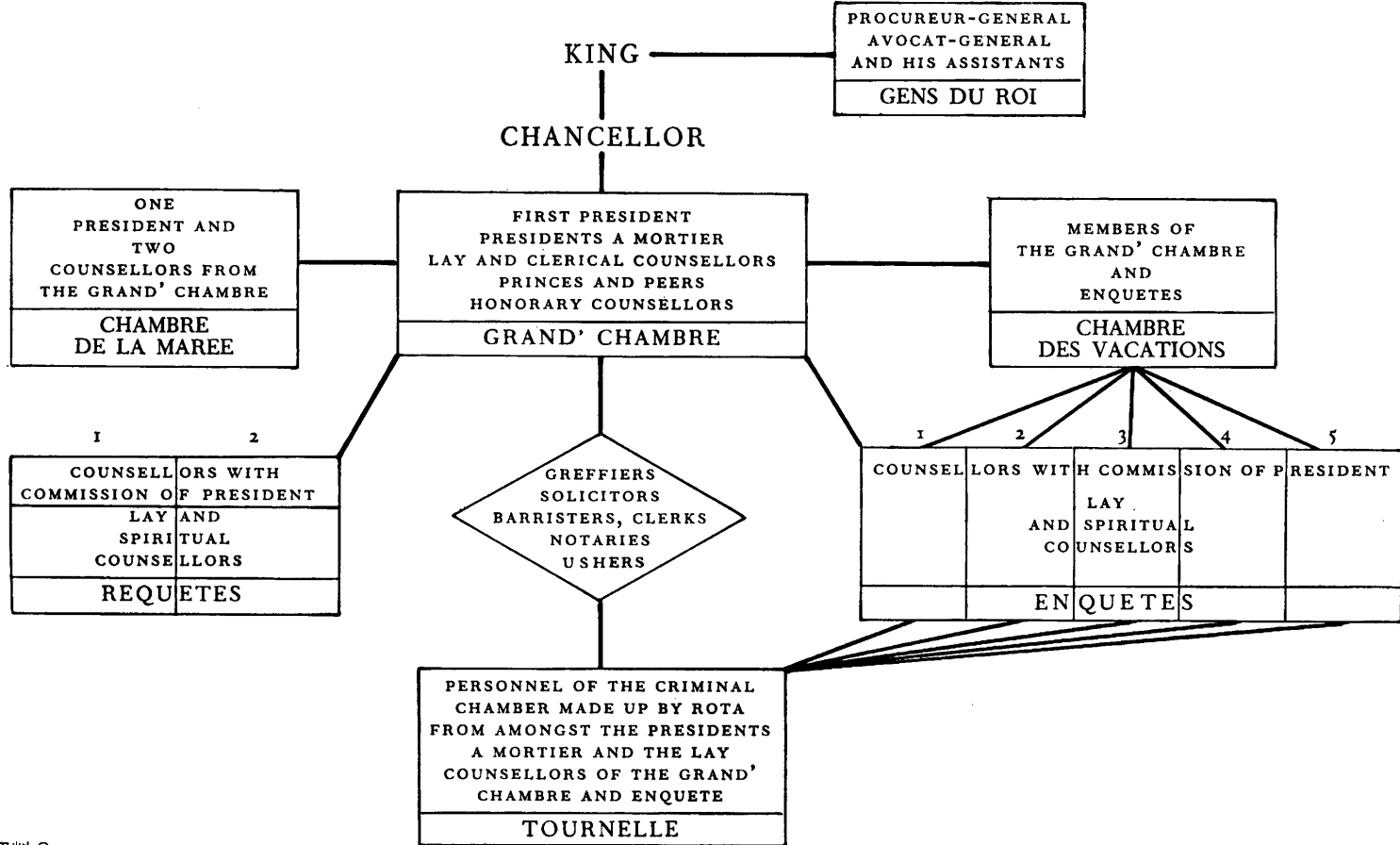
1653年以降、パリ高等法院では直接大審部に入る者はもはやだれもいない。大審部に籍をおく者が死亡すると、予審部評定官がその先任順に従って大審部に昇進し、高等法院の先任順に応じた大審部での職務につくのである。従って、大審部は一般的には高等法院に25年以上勤務した経験のある人が構成する。



Source : carte tirée de L. et A. Mirot, *Manuel de géographie historique de la France*, Paris, Picard, 1947 (réédité en 1980), pp. 376-377.

資料 1

APPENDIX I—The Organisation of the Parlement



トゥルーズ高等法院の大審部の構成員は、法院長、4人の部長評定官、32人の評定官、うち2人は聖職者、3人の生まれながらの名誉評定官、つまりトゥルーズ大司教、ミルポワ司教、サンセルナン修道院長である。ルイ14世の時代以降、2人の名誉騎士、部長評定官の右側に席をもつ貴族が大審部に所属した。また、4人の4分の1期の掌請官、《検事》が大審部の構成員である。

ブザンソン高等法院では、大審部は1704年に創設されたが、特別な職員はいなかったようである。この高等法院の司法官は、1年の間、順次各部に議席を占めていた。各部というのは大審部、刑事部(Tournelle)、予審部、治水・保林(Eaux et Forêts)部、司法官掌請部で、休暇中には今度は彼らが休暇部の職務についた。

大審部職員の任務は非常に重くなることがあった。パリの大審部は、主席検事が王権の側の訴訟当事者であるすべての訴訟事件を裁判する。すなわち、統治もしくは行政面のあらゆる事件を裁判する。また采地とみなされた土地に関するすべての訴訟事件、フランスの重臣のすべての訴訟事件を裁判する。司教・修道院長の空位中にその管区の職禄をフランス国王が受けたり、他に授与したりする権利(régale)に関するすべての事件を裁判する。パリ市立病院や救貧院(Grand Bureau des Pauvres)、団体としてのパリ大学に関するすべての訴訟事件を裁判する。大逆罪を裁判する。主な宮廷職、高等法院の部長や評定官、会計検査院(Chambre des Comptes)の部長、長官、監察官、検査官捕の刑事訴訟を裁判する。聖職者、貴族、司法官が犯した犯罪について初審及び終審裁判をする。高等法院の予審部と審理部の判決の上訴裁判をする。予審部や審理部で票が割れた場合の裁判をする。上座裁判所(présidial)、バイイ裁判所(bailliage)、セネシヤル裁判所(sénéchaussée)の判決の上訴裁判をする。

大審部の下に、一つもしくは複数の予審部がある。その役割は、高等法院に訴えられてきて、予審、すなわち証人の喚問を通して証拠にたどり着く必要がある訴訟を、書類で判断すること



9. A Royal *Lit de Justice*, taking place in the Grand'Chambre, 1643.

資料3

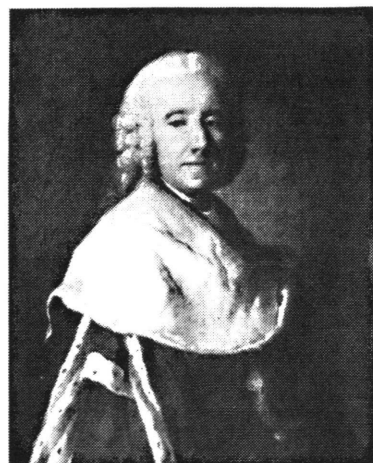


Plate 6 President (later First President) M. F. Moïé, by L. Tocqué (private collection)

資料4

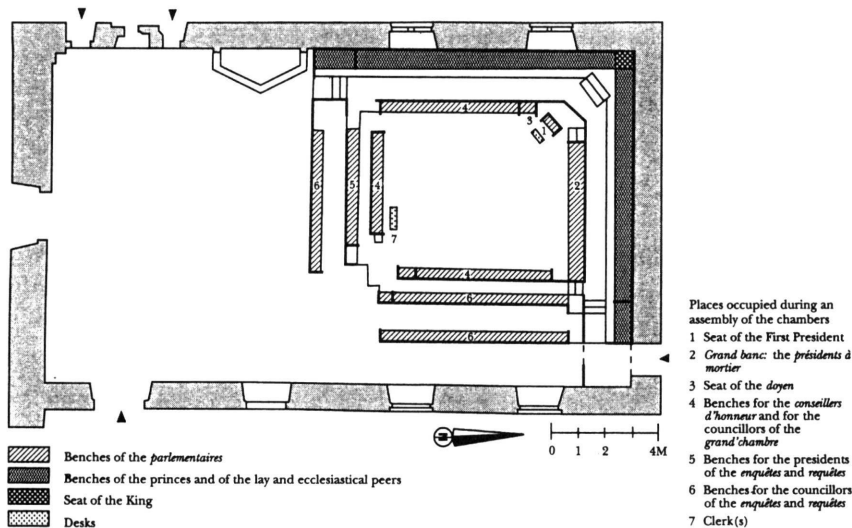


Figure 3 Reconstruction of the seating arrangements in the grand'chambre for an assembly of the chambers (by Nadine Marchal and the author)

資料5

よって》送られてきた訴訟事件の裁判権ももっていた。

パリ高等法院は5つの予審部を使っていた。一つ一つの予審部の構成は、3人の部長、聖職者16と俗人16からなる32人の評定官、であった。部長職は予審部の評定官についてはじめて獲得することができた。トゥルーズ高等法院には、2やがて3の予審部があった。他の高等法院は予審部は一つであった。1756年以後、国王はパリ高等法院の組織を簡素化し、職員数を減らして王権を伸ばそうとした。予審部はもはや3つしかおかれなくなった。各部の部長は2人だけとなった。2人の部長は、部長職をもたず、ただ評定官職をもち、部長として委任されるだけとなった。

階層のかなり低い方に、やっと一もしくは二の審理部が高等法院の一角をなしていた。審理部のメンバーは、終身官職であると同時に《裁判所の審理部で職務につくため》の委任状を得なければならなかった。審理部は特権者の民事上の、個人的な、不動産占有権を保護するための、併合訴訟の初審裁判を行っていた。その特権者とは、特許等に押された官印もしくは司法上の証明書に押された官印のある特別受審王状(committimus)の権利を所持していた者である。特別受審王状とは、王がある人物に、指名された裁判官の前で請求もしくは弁護する際に、第1審訴訟を行うことを認める特権であり、彼らが利害を有する訴訟をそこに移送することを認める特権である。王がその保護の下にあるとみなした人物に関するものであった。フランスの大尚書局は特許等に押された官印付きの特別受審王状を交付していた。この場合、裁判官は王宮掌請部やパリの審理部が担当した。地方の高等法院のそばにある尚書局は、司法上の証明書に押された官印付きの特別受審王状を交付していた。それはその地方高等法院の管轄内で有効であり、この場合、関係する高等法院の審理部が裁判官であった。

特許等に押された官印付きの特別受審を享受する者は以下の者である。王族の王子、公爵、

である。その証人の供述は書類に記録される。予審部は民事裁判を行う。また、《軽犯罪の刑事裁判》も行う。つまり、その時には金銭に関する刑の宣告のみを行う。予審部はまた、顧問会議の判決について、《上級裁判所が下級裁判所に代わって行う破棄自判に

重臣、宮廷職、精霊騎士団の騎士及び官吏、国王顧問会議の評定官、大使、掌請官、大尚書局の書記官、官吏、王室の奉公人、王や妃や王子や第一の王族の家の食事仲間たち、彼らと同列に置かれていた官吏である。また、一般に献身的に仕える忠実な人であり、また、地方権力に反対して王を助け、地方の諸団体や組合や有力者の報復を恐れなければならなかった客である。

パリ高等法院には審理部が二つあった。各審理部には3人の部長と10から12人の評定官がいた。他の高等法院は審理部は一つしかなく、さらにブザンソンの高等法院の審理部は扱う訴訟事件が非常に少なかったので治水・保林をその権限に付け加えなければならない程であった。

刑事部(La Tournelle)は特別な部であり、《重罪の犯罪者》すなわち体刑をとまなう刑事訴訟事件を上訴審及び最終審として裁判した。従って、そのメンバーは、他の部から順番に採用された世俗の人だけであった。パリ高等法院では、束縛を和らげ、冷酷になることを避けるために、そのメンバーは3ヶ月ごとに交代した。刑事部では、各四半期に議席を占めてきたのは、大審部部長評定官が4人、大審部評定官が6人、各予審部から評定官が2人で、合計20人の司法官であった。トゥルーズ高等法院では、司法官は3ヶ月ごとに刑事部にも勤務していたが、そこでは、同じ司法官が続けて3、4年の間、毎年、刑事事件を担当させられることがあった。トゥルーズの刑事部は、大審部部長評定官3人、評定官10人を数え、ついで18世紀には大審部部長評定官5人、評定官18人を数えるようになった。

民事法廷も存在した。パリ高等法院の民事法廷は1667年、1697年等、付随的に存在しただけであった。

すべての高等法院には休暇部があり、司法上の休暇中、緊急な訴訟事件、特に刑事訴訟の業務を行い、王令、勅令、王状を一時的に登録して執行力を与えた。休暇部は、大審部に対し判決が有効であることの言い渡しを委ねていた。官吏の受け入れ手続きは休暇の後、裁判所が開廷されると大審部の前で更新されていた。パリ高等法院では、休暇部は聖十字架頌揚祭(9月14日)から冬の聖マルタンの祝日の翌日(11月12日)まで置かれていた。休暇部は部長1人と12人の評定官からなり、大審部構成員と予審部評定官の中から順番に採用されていた。

高等法院は、地方の訴訟事件のため、あるいは大審部からある範疇の訴訟事件の負担を軽減するために、しばしば特別な部をもっていた。パリ高等法院では、鮮魚部(Chambre de la Marée)が海の魚の取引に関する民事・刑事のすべての訴訟事件の裁判権を有していた。鮮魚部は大審部部長評定官1人、大審部の世俗評定官の最年長者とその次の年長者からなり、他の裁判官が補佐していた。トゥルーズ高等法院では夜警部が週3回設置され、大審部あるいは刑事部から送られてきた微罪の訴訟事件を解決していた。そこには部長1人と、各部から3人、およそ15日ごとに交代する12人の評定官が議席を占めていた。

新教徒のために勅令部(Chambre de l'Edit)を設けている高等法院もあった。1598年、ナント

で発せられた、講和令の30条から57条の条文は、《前述の改革派と主張する宗教の人が、民事・刑事両方に関して、請求もしくは弁護する、訴訟の主な当事者であるか、あるいは保証人である》訴訟及び紛争を裁判するために、特別な部を制定し、取り決めていた。講和令はトゥールズ高等法院の管轄のために、カストルに置かれた部を追認していた。講和令はパリ高等法院にも一つ、パリ高等法院の管轄とノルマンディー及びブルターニュの高等法院の管轄に対して制定し、この高等法院の一つ一つに勅令部が創設されるのを待った。講和令はボルドー高等法院の管轄に対して、一つ、ドーフィネ高等法院の管轄とプロヴァンス高等法院の管轄に対してグルノーブル高等法院に一つ、勅令部を創設していた。ブルゴーニュ高等法院の管轄の《改革派と称する宗教の人》は、パリ高等法院の勅令部かドーフィネ高等法院の勅令部のどちらかを選択して法廷で弁護することができた。

勅令部は部長2人を数えることになっており、1人はカトリック、1人は改革派を主張する宗教であった。評定官は12人で、カトリック6人、《他の宗教》の者6人となっていた。カトリックの主席検事が検事代理として1人、プロテスタントの次席検事が検事代理として1人となっていた。民事及び刑事書記には書記補が2人となっていた。執達吏はカトリックとプロテスタントとなっていた。保証金分配係兼罰金受取係が一人となっていた。部長や評定官はこの法院の団体から採用されることになっており、新たな部長や評定官は改革派と称する宗教の人々の数を補うために必要に応じて創設されることになっていた。

勅令部は対応する高等法院で召集され、編入されることになっていた。そのメンバーはこの法院の部長及び評定官とみなされ、投票権をもち、部会のあらゆる審議への出席権をもち、この法院の他の部長や評定官と同様、保証金、職権及び優越権をももっていた。勅令部は、それが設立されていた管轄で高等法院の形式やスタイルを保持し、パリの勅令部の外では、両方の宗教を同じ数だけ裁判することになっており、そこから、《二等分された部》という別の名が生まれた。この部は、各部が設立されていた高等法院の前で宣誓を行う新しい部長や評定官を試験することができた。さもなければ、試験や宣誓は閣議で行うことができた。ラングドックの勅令部では、フランスの尚書が巧みにも宣誓を受けていた。こうした部は、王及びその他の下級職を受け入れることができ、改革派と称する宗教の人の場合は高等法院に所属することになっていた。しかし、彼らの宣誓は高等法院の法廷の前でなされることになっていた。これらの部は、その部が所在する都市の公安と警察のための権限をもっていた。

こうした規定は高等法院の悪意のためにやっとのことで適用された。1604年5月7日の顧問会議の判決は、勅令部を引き合いに出すためには当事者が少なくとも6ヶ月は《改革派と称する宗教》であることを表明しているべきであることを明確にした。

パリ高等法院では、勅令部は部長1人と評定官16人から成った。王は自ら、高等法院の司法官の中から勅令部の職員を選んでいった。ナントの勅令により、王は改革派と称する宗教の評定官を6人、パリ高等法院の勅令部に置くことができた。実際、王が勅令部に導き入れたのは

1人だけであった。

ノルマンディーの勅令部は1599年8月にルーアン高等法院に設置された。

トゥールーズ高等法院では、王は高等法院が作成した12名の名前の載ったリストをもとに勅令部のメンバーを選んだ。ナントの勅令の42条はこの司法官ができるだけ長い間職務につくことを規定していたが、王は一年間有効な委任状によって8人のメンバーを任命していた。1611年、王妃は意のままに勅令部の8人のメンバーを選んだ。ついで、顧問会議の判決は毎年4人ずつ更新することを命じた。1637年6月6日、高等法院は、毎年高等法院の各部から年長者2人が表の順序に従って二等分された勅令部に行き、勅令部の年長者2人が2年目も業務を行うことを決定した。しかし、高等法院が認めたり、あるいは王が命じた例外があった。1639年3月の勅令は、主席検事と次席検事の2人の新しい検事補を創設した。ラングドックの勅令部は、1595年から1621年までカストルに、1623年から1629年までベジエに、1629年にピュイロランスに、1630年にルヴェルに、1631年と1632年にサン・フェリックス・カラマンに、1632年から1670年までにカストルに置かれ、1671年から1679年に廃止されるまでカステルノダリに置かれた。

ボルドー高等法院はどうかというと、王は、プロテスタントの町でかつてのナヴァール王の居住地であったネラックに、勅令部を設置した。王は1600年6月の勅許状でそのメンバーを任命した。ボルドー高等法院は、改革派と称する宗教の部長や評定官が勅令の法院・部の評定官に招かれることを条件に彼らを登録することを望んだ。そのため、彼らは高等法院の法院団体に属するとみなされた。プロテスタントで新たに任命を受けた人が1601年2月に宣誓を行うために出頭した時、高等法院は、大法官の前ですでに宣誓を行っていたとして、彼らに宣誓を免除した。彼らは高等法院の法院名簿には記載されなかった。その上、長い間、勅令部の業務についていた司法官たち、部長1人、大審部部長評定官3人、予審部評定官3人もまた記載されていなかった。勅令部は1601年3月22日にネラックに設置された。

大評議会(Grand Conseil)では、1690年まで、王は掌請官に6ヶ月ごとの部長職を委任した。この部長は、先任順に従い、順番に法院長の職務を行なった。1690年2月、王は公職という肩書きで6ヶ月ごとに委任する法院長1人と部長8人を創設した。1738年1月、その職は廃止され、王の親任官がそれに替わった。國務院の評定官は法院長の職務を行っていた。掌請官は6ヶ月ごとに委任されるという理由から、部長に任じられていた。1年間交付される委任は、更新されることはまれであった。1768年1月の勅令では、法院長は3年、部長は4年と、継続委任の合計期間を固定した。評定官は1768年より前は52であった。1768年1月の勅令は評定官の数を44に戻した。1774年11月の勅令により、評定官は54に引き上げられた。なお、名誉評定官が存在していたが、職務は行っていなかった。

司法官の実数

1598年、様々な部の職務についてみると、パリ高等法院には司法官として次のような人が

いた。部長7人、聖職者評定官40人、うち予審部部長4人、世俗評定官100人、そのうち4人が予審部部長4人で1人が審理部部長。《検事》として次席検事2人、主席検事1人。実際、《聖職者》評定官のなかには世俗の者もいた。総計、150人の司法官がいた。1685年、パリ高等法院は287人の司法官からなり、そのうち33人が大審部職員、165人が予審部評定官、66人が審理部評定官、3人が《検事》であった。

ブルターニュ高等法院の評定官の定員数は、1724年、予審部や審理部の部長を含めて94であった。

ボルドー高等法院の司法官は、1774年から1790年まで、数にして153であった。

ブルゴーニュ高等法院は次の人によって構成されていた。法院長1人、大審部部長9人、名誉騎士2人、生まれつきの名誉評定官1人、シトーの修道院長、72人の評定官、うち聖職者6人、次席検事2人と主席検事1人と検事補8人からなる検事局である。

トゥルーズ高等法院は116の司法官を数えた。

司法の補助者たち

各法院には、様々な種類の司法吏である、司法の補助者がいた。1598年、パリ高等法院は次のような補助者がいた。書記補つき書記4人、執達吏(huissier)22人、公証人4人、保証金の受け取り及び支給人、代訴人、官吏ではない弁護士、尚書局など。ブルゴーニュ高等法院は書記局を用いており、そこには提示書記1人、確認書記1人、書記補5人、権標杖もちの執達吏15名、司法官掌請部所属の執達吏6名がいた。高等法院には、およそ150人の弁護士からなる弁護士団があり、彼らは官吏ではなかった。100人代訴人がいた。尚書局があり、国璽尚書評定官1人、国王書記官25人、尚璽(しょうじ)、封印を施す人、受け取り人、書記、正本保管官、蠟燭点火係及び執達吏からなっていた。いくらか差異はあるが、高等法院にはみな同様の補助者が見られる。トゥルーズ高等法院は、6人の書記長がみな高貴な出で、40人の書記補をようしていたことを誇っていた。また、尚書局には国王書記官25人と尚璽、封印を施す人、正本書記、蠟燭点火係というその一行がいた。多くの聖職者をようし、代訴人は117人いたこと、弁護士がいたことを誇っていた。

職業階層

職業階層は、すべての高等法院でよく似ており、17世紀末の親裁座や集会での席順に従えば、上から順におおよそ次のようであった。法院長、大審部部長評定官、王族の王子、6人の聖界の重臣、先任順による世俗の重臣、閣議の評定官、ただし20年閣議に出席しているか、10年間高等法院の評定官であること。生まれながらの名誉評定官、名誉騎士、名誉評定官、掌請官、大審部職員、予審部評定官、審理部評定官、所属する部の順の名誉職の部長及び名誉職の評定官。王族の王子を除いて、重臣と生まれつきの名誉評定官はみな、以前に高等法院の評定官であったかもしくは当時評定官であった者であった。その次に次席検事や主席検事という《検事》がきた。



6. Two parlementaire styles of dress in the seventeenth century. An ordinary councillor and President à Mortier. From a contemporary print by Leclerc.

資料6

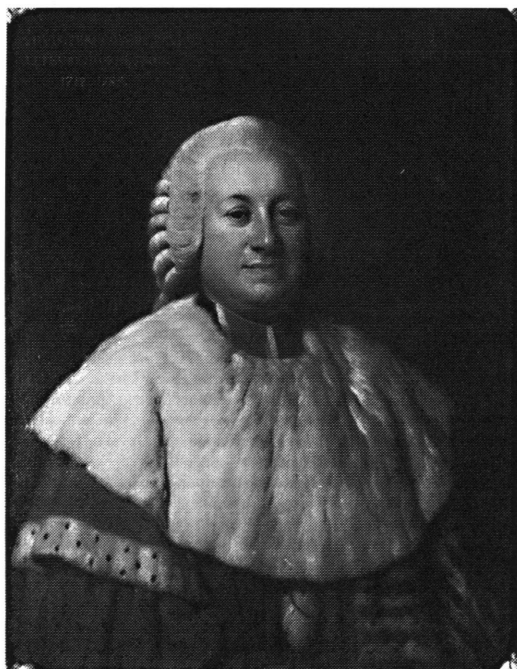


Plate 5 *Avocat général* (later President) L. F. Le Fèvre d'Ormesson, painting

資料7



Plate 12 J. B. M. Titon, Councillor at the *Parlement*, anonymous engraving after a painting by J. F. de Troy

資料8

司法官の次に、司法吏である司法の補助者が来る。民事担当書記を筆頭とした書記、国王書記官や尚書局の他の官吏、主席執達吏を筆頭とする執達吏の順であった。

この司法吏たちは法院の団体に属しておらず、民事担当書記と刑事担当書記及び主席執達吏についてはこの点では異論の余地があるが、司法吏は下級の席次で法院に属していた。

ブリュシュ(F. Bluche)氏によれば、パリ高等法院の実際の内部の階層は次のようなものであった。法院長、部長、主席検事、主席書記、次席検事、評定官、主席執達吏、検事補。

しかし、弁護士、代訴人、公証人といったそれにつぐ補助者は、法院に雇われてはいたが、法院には所属していない。権利を述べる弁護士は、必要な場合には評定官として裁判所に席を置くことができた。そのうちの一人は検事が欠席する場合には、法院長より次席検事の役に任命されることもあり、弁護士は司法吏の前に置かれるであろう。代訴人と公証人は手続きという《卑しい》業務を行い、王の官吏である。代訴人と公証人は確かに国王書記官、書記、主席執達吏のあとにくるが、尚書局の他のすべての官吏、他のすべての執達吏の前、単なる執達吏の前にくることになっていた。

法院長は特に《勅使》である。法院長は、前任者から官職を購入し、後任者から支払いを受ける特許権を王から授かっていたが、委任によってその職務につく。しかし、いわゆる《検事》は、《王の利害と公安を保つ》職責を負った次席検事と主席検事である。主席検事は王によって任命され、ペンをとって書面の申し立てを作成する。主席検事は直接大法官や國務卿と連絡をとる。主席検事は王の命令を会議に持って行くことができる。主席検事は、検事補とみなされる下級裁判所の《検事》を監督する。次席検事は申し立ての言葉を述べる。次席検事は審問で主席検事の申し立てを朗読する。次席検事は、部長や評定官の審議の時には退出し、判決の公聴会の時には戻ってくる。

レンヌ高等法院では、その階層は、ブルターニュの出身者とそうでない者との区別によって修正を被っていた。1532年8月14日の併合勅令は、ブルターニュが永久にフランスに併合されることを宣言したが、その地方の法律、自由、特権が保たれ遵守されることが条件であった。このことは1532年9月のプレシ・マセの勅令により明確にされた。こうして、高等法院が1554年3月のフォンテーヌブロー勅令で設けられた。それは司法が《慣例により》ブルターニュで保たれるためと同時に、王の権威を保障するためでもあったが、レンヌ高等法院の司法官は半分がブルターニュ人もしくは《その土地の人》であり、半分が他の地方の人あるいは《その土地の出身者でない者》であった。レンヌ高等法院は6ヶ月であった。最初、《その土地の出身者でない者》は、会期が3ヶ月に変わってはいいたが、大部分はパリ出身者であった。会期を6ヶ月に引き上げた1600年の勅令以降、そのパリ出身者は何人かの若い人たちに変わり、次いで彼らはパリ高等法院に入ることを許されていた。《その土地の出身者でない者》は大部分はメーヌ、アンジュー、ポワトゥー出身者であった。《その土地の出身者でない者》は結局はブルターニュに居を定め、そこで、デカルト家、ジャクロ家、ユベール家、マルブー一家

などの家系を築いた。ポワイレヴ家、ドゥノワ家、ラ・フォレ・ダルマイエ家、ル・フェーヴル家、フーケ家、デュ・ポン家という家系は、ブルターニュとその出身地方との間に分割されたままであった。1640年、2月からの6ヶ月間に、47人中16人、《その土地の出身者でない者》を数え、8月からの6ヶ月間は52人中22人であった。

《その土地の出身者でない者》の職務につくためには、出生地とその家族について、ブルターニュ外であることを必要とした。王がいつか与えようとしていた職務の法院長は、原則としてブルターニュ出身でない者であった。しかしながら、1622年の法院長アンリ・ド・ブルニユフはバリ高等法院内の同盟のため、1777年の法院長メルディ・ド・カテュエロは和解のしるしとして、ブルターニュ人であった。他の地方の者はブルターニュ人の職を獲得した。ブルターニュ人は、その買い取り価格はかなり高かったが、《その土地出身でない者》の職を獲得した。その時は彼らの祖先、自分たちがブルターニュ外の生まれであること、ブルターニュの外に長い間滞在していたこと、その両親が他の地方にいることを引き合いに出していた。

1656年6月27日の規則によれば、ブルターニュに居を定めた者の子供はブルターニュ出身とみなされていた。1683年7月21日の規則によれば、ブルターニュ出身者とそうでない者との区別は、過去40年の間、新たに任命された人の家族の主な居住地によって行われることになっていた。ブルターニュ出身者でない者に当てられた官職の保持者は、その人とその子孫が最終的にはその土地の出身でないといみなされるようになっていた。しかし、その官職がブルターニュ出身者でないとして与えられて受け取られたとはいえ、この条件のもとでの祖父から父へ、次いで子への絶え間なく譲渡されることによって、その官職がブルターニュ出身者に移されていった。

1724年にレンヌ高等法院が6ヶ月から1年になると、最下級の価格でさえ、その職にブルターニュ出身でない者を見出すことは困難であった。5人の官吏は、生涯、家族の一員に保証金と配偶者あての資産を保持することを条件として、その職務の廃止を王に願い出た。他の2人は、王から一つ、高等法院から一つ、その官職の買い戻しをした。1735年、レンヌ高等法院にはブルターニュ出身でない者が43人おり、1788年には部長及び評定官80人のうち24人であった。

むすびにかえて

フランスの歴代の王は、高等法院の司法官の権威が法を施行する権威に基づいている、と絶えず主張してきた。成文憲法がない時代、高等法院の登録簿は、王が王国に及ぼす至上権と法が王に及ぼす至上権の両方にとって最良の支えであった。王の忠告者である高等法院の職員は、ピエール・ド・フォンテーヌのような、聖王ルイの時代の法学者から、1794年に断頭台で亡くなった、ラモワニオン家という名門の家柄の代表者であるマルゼルブのようなルイ16世の治世下の不運な司法官に至るまで、皆、王の法を定め、施行し、守るという共通の義務のもと

に団結していた。その義務とは、フランス国家そのものを維持することにほかならなかった。従って、こうした司法官たちが、彼らの司法的権威により広範な政治的権力を加えることになることは驚くにはあたらないことであった。⁽²⁾ここに高等法院が果たした役割とその意義を探る理由がある。

【参考資料の出典】

資料1 Paul Delsalle, *"Vocabulaire historique de la France Moderne, XVIe-XVIIe-XVIIIe siècles"*, Éditions Nathan, Paris, 1996.

資料2 J.H.Shennan, *"The Parlement of Paris"*, London : Eyre & Spottiswoode, 1968.

資料3 J.H.Shennan, 前掲書.

資料4 J.Rogister, *"Louis XV and the Parlement of Paris, 1737-1755"*, Cambridge :Cambridge University Press, 1995.

資料5 J.Rogister, 前掲書.

資料6 J.H.Shennan, 前掲書.

資料7 J.Rogister, 前掲書.

資料8 J.Rogister, 前掲書.

資料9 Benoit Garnot, *"La Justice en France de l'an Mil à 1914"*, Éditions Nathan, Paris, 1993.

注

(1)本稿は Roland Mousnier, LES INSTITUTIONS DE LA FRANCE SOUS LA MONARCHIE ABSOLUE, Livre I V、Chapitre II, PP.297-305 をもとにしている。

(2)J.H.Shennan, "The Parlement of Paris", PP.147-148

あとがき

本稿はフランスの高等法院の研究であるが、高等法院研究については、早稲田大学の安齋和雄先生に参考文献等を含めてご指導いただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

CHRONOLOGIE

資料 9

112

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>Règne de Hugues Capet (987-996) (dynastie des Capétiens).</p> <p>Règne de Henri I^{er} (1031-1060)</p>	
<p>Règne de Philippe II Auguste (1180-1223) 1204 : prise de Constantinople par les croisés. 1214 : victoire de Bouvines sur la coalition suscitée par le roi d'Angleterre Jean sans Terre.</p>	<p>1180 : première prohibition du duel judiciaire. 1182 : ordonnance sur les blasphèmes.</p>
<p>Règne de Louis IX (Saint-Louis, 1226-1270) 1226-1236 : régence de Blanche de Castille.</p>	
<p>1249-1254 : septième croisade.</p>	<p>1239 : première apparition du mot de « parlement ».</p>
<p>1259 : traité de Paris avec l'Angleterre.</p>	<p>1258 : interdiction générale du duel judiciaire. 1268 : ordonnance punissant les blasphémateurs.</p>
<p>1270 : huitième croisade et mort du roi à Tunis.</p> <p>Règne de Philippe III le Hardi (1270-1285)</p>	<p>1272 : nouvelle ordonnance punissant les blasphémateurs. 1274 : ordonnance réglementant le statut des avocats.</p>
<p>1285 : échec de la « croisade d'Aragon ».</p>	
<p>Règne de Philippe IV le Bel (1285-1314) 1302 : convocation des états généraux. 1303 : attentat d'Anagni contre le pape Boniface VIII. 1305 : le nouveau pape Clément V s'installe à Avignon.</p>	<p>1302 : institutionnalisation du parlement de Paris. Création du parlement de Toulouse.</p>

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>1312 : suppression de l'ordre des Templiers.</p> <p>Règne de Louis X le Hutin (1314-1316) Mouvement des chartés.</p>	<p>1306 : le roi réautorise le duel pour établir la preuve des crimes les plus graves, à défaut de témoins.</p>
<p>Règne de Philippe V le Long (1316-1322)</p>	<p>1315 : ordonnance réglementant l'emploi de la torture.</p> <p>1319 : nouvelle ordonnance réglementant l'emploi de la torture.</p>
<p>Règne de Philippe VI (1328-1350) 1328 : avènement de Philippe VI (dynastie des Capétiens-Valois) au détriment d'Edouard III d'Angleterre. 1337 : début de la guerre de Cent Ans.</p>	<p>1337 : première trace de l'existence de prévôts des maréchaux. 1345 : ordonnance qui met fin au renouvellement annuel du parlement de Paris et qui stabilise son personnel. Le statut des avocats est réglementé définitivement.</p>
<p>1346 : défaite de Crécy.</p>	
<p>1347-1348 : épidémie de peste noire.</p>	<p>1348 : nouvelle ordonnance punissant les blasphémateurs.</p>
<p>Règne de Jean II (1350-1364)</p>	<p>1355 : ordonnance qui oblige le procureur du roi à poursuivre tout auteur de crime.</p>
<p>1356 : défaite de Poitiers et captivité du roi. 1356-1360 : régence du dauphin Charles. 1358 : révolte de Paris sous la conduite d'Etienne Marcel. Insurrection paysanne autour de Paris (jacquerie). 1360 : traité de Calais.</p>	
<p>Règne de Charles V (1364-1380)</p>	
<p>Règne de Charles VI le Fol (1380-1422) 1392 : folie du roi. Début de la rivalité entre Armagnacs et Bourguignons.</p>	<p>1397 : nouvelle ordonnance punissant le blasphème.</p>

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>1420 : traité de Troyes qui donne à l'Angleterre la plus grande partie du royaume.</p> <p>Règne de Charles VII (1422-1462)</p> <p>1429 : sacre du roi à Reims, avec Jeanne d'Arc.</p> <p>1438 : Pragmatique Sanction de Bourges (charte de l'Église de France).</p> <p>1453 : fin de la guerre de Cent Ans.</p> <p>Règne de Louis XI (1461-1483)</p> <p>1465 : Ligue du Bien public rassemblée autour de Charles le Téméraire.</p> <p>1468 : traité de Péronne.</p> <p>1477 : mort de Charles le Téméraire.</p> <p>Règne de Charles VIII (1483-1498)</p> <p>1483-1494 : régence d'Anne de Beaujeu.</p> <p>1497 : expédition à Naples.</p> <p>Règne de Louis XII (1498-1515)</p> <p>1499-1500 : conquête du Milanais.</p>	<p>1402 : arrêt du parlement de Paris qui réglemente le versement des épices.</p> <p>1413 : ordonnance « cabochienne », prise par les États Généraux contre les « caymans » (mendians et vagabonds sans travail).</p> <p>1453 : ordonnance qui généralise la possibilité de l'appel devant le parlement dans les procès à l'extraordinaire. Création du parlement de Grenoble.</p> <p>1462 : création du parlement de Bordeaux.</p> <p>1476 : création du parlement de Dijon.</p> <p>1493 : édit qui interdit aux seigneurs d'exercer personnellement leur droit de justice.</p> <p>1498 : ordonnance qui généralise notamment le secret de l'instruction dans la procédure extraordinaire.</p> <p>1499 : création du parlement de Rouen.</p> <p>1501 : création du parlement d'Aix.</p> <p>1510 : ordonnance sur les blasphèmes.</p>

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>1513 : défaite de Novare (les Français chassés d'Italie).</p> <p>Règne de François I^{er} (1515-1547)</p> <p>1515 : victoire de Marignan et reconquête du Milanais.</p> <p>1520 : entrevue du camp du Drap d'or avec Henri VIII d'Angleterre.</p> <p>1525 : défaite de Pavie. François I^{er} prisonnier de Charles Quint.</p> <p>1529 : traité de Cambrai qui met fin aux prétentions françaises en Italie.</p> <p>1534 : affaire des Placards. Propagation de la Réforme.</p> <p>1539 : ordonnance de Villers-Cotterêts.</p> <p>Règne de Henri II (1547-1559)</p> <p>1552 : annexion des Trois Évêchés (Metz, Toul et Verdun).</p> <p>1559 : paix de Cateau-Cambrésis.</p> <p>Règne de François II (1559-1560)</p> <p>1560 : conjuration d'Amboise.</p>	<p>1515 : ordonnance qui organise définitivement les chambres criminelles des parlements (les Tournelles).</p> <p>1522 : édit généralisant les procureurs du roi auprès de tous les sièges royaux.</p> <p>1523 : édit réprimant les blasphèmes.</p> <p>1534 : édit introduisant le supplice de la roue dans le système répressif pour le vol de grand chemin.</p> <p>1536 : édit de Crémieu, qui précise les attributions des prévôts.</p> <p>1538 : <i>Pratique judiciaire</i> de Jean Imbert.</p> <p>1539 : ordonnance de Villers-Cotterêts, qui distingue notamment dans la procédure l'instruction et le jugement, et qui instaure l'appel direct en parlement.</p> <p>1547 : suppression du droit d'asile. Édit contre l'hérésie protestante.</p> <p>1552 : création des soixante premiers présidiaux.</p> <p>1554 : création du parlement de Rennes.</p> <p>1556 : édit s'attaquant aux mariages clandestins. Édit réprimant l'infanticide et l'avortement, assimilés à un homicide.</p> <p>1559 : <i>De poenis temperandis</i> d'André Tiraqueau. Ordonnance qui précise les attributions des prévôts.</p>

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>Règne de Charles IX (1560-1574) 1562 : massacre de Voasy. Début des guerres de religion. 1572 : massacre de la Saint-Barthélémy.</p>	
<p>Règne de Henri III (1574-1589) 1579 : ordonnance de Blois 1588 : journée des Barricades à Paris. États généraux de Blois. Assassinat du duc de Guise. 1589 : assassinat du roi.</p>	<p>1579 : ordonnance de Blois, qui définit et interdit notamment le rapt de séduction et proscribit le duel, et qui enlève aux baillis toute voix délibérative dans les tribunaux de bailliage.</p>
<p>Règne de Henri IV (1589-1610) 1593 : abjuration du roi. 1594 : entrée du roi dans Paris. 1598 : édit de Nantes (paix intérieure) et traité de Vervins (paix extérieure). 1610 : assassinat du roi.</p>	
<p>Règne de Louis XIII (1610-1643) 1610-1617 : régence de Marie de Médicis. 1617 : assassinat de Concini. 1618 : début de la guerre de Trente Ans.</p>	<p>1620 : création du parlement de Pau. Érection des charges de procureur au parlement de Paris en offices.</p>
<p>1624 : entrée de Richelieu au Conseil. Révolte des Croquants du Quercy.</p>	<p>1626 : édit faisant du duel un crime non grâçiable.</p>
<p>1627 : siège de la Rochelle. 1629 : édit de grâce d'Alès. 1630 : journée des Dupes.</p>	

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>1636 : soulèvement des paysans du Poitou et de l'Angoumois. 1637 : émeutes rurales dans le Périgord. 1639 : révolte des Nu-pieds de Normandie. 1642 : mort de Richelieu.</p>	<p>1633 : création du parlement de Metz.</p>
<p>Règne de Louis XIV (1643-1715) 1643 : régence d'Anne d'Autriche avec Mazarin. Révoltes populaires dans le Rouergue. 1648 : traités de Westphalie. 1648-1653 : Fronde. 1656 : Révolte des Lustucrus du Bourbonnais.</p>	<p>1656 : fondation de l'hôpital général de Paris. 1657 : création du conseil supérieur d'Alsace.</p>
<p>1659 : traité des Pyrénées. 1661 : mort de Mazarin. Entrée de Colbert au Conseil.</p>	<p>1662 : instauration du « pain du roi » dans les prisons pour les détenus indigents.</p>
<p>1665 : révolte des Miquelets du Roussillon.</p>	<p>1667 : création de la charge de lieutenant de police de Paris.</p>
<p>1668 : traité d'Aix-la-Chapelle.</p>	<p>1669 : création du conseil souverain de Perpignan. Ordonnance des Eaux et Forêts, qui punit de mort l'incendie volontaire commis dans les forêts du roi.</p>
<p>1672 : installation de la cour à Versailles. Guerre de Hollande.</p>	<p>1670 : ordonnance criminelle de Saint-Germain-en-Laye. 1671 : édit soumettant les pèlerins à une réglementation, assortie de sanctions pénales.</p>
	<p>1673 : édit qui institue, sous la forme du privilège obligatoire, une véritable censure préalable de l'écrit.</p>

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
1675 : insurrections en Bretagne.	1676 : création du parlement de Besançon. 1677 : création du conseil souverain d'Arras.
1678 : traités de Nimègue.	1679 : édit faisant du duel un crime imprescriptible. 1680 : ordonnance réglementant la répression de la contrebande. 1682 : édit proscrivant les Bohémiens. Édit dépenalisant la sorcellerie et faisant de l'empoisonnement un crime distinct (il n'était auparavant considéré que comme une forme aggravée d'homicide).
1683 : mort de Colbert.	1686 : création du parlement de Douai.
1685 : révocation de l'édit de Nantes.	
1687 : grave famine.	
1688 : guerre de la Ligue d'Augsbourg.	
1693-1694 : famine.	
1697 : traités de Ryswick.	1698 : installation du conseil souverain d'Alsace à Colmar. 1699 : édit établissant un lieutenant de police dans chaque ville de juridiction royale. 1700 : ordonnance interdisant le port d'armes.
1702 : révolte protestante des Camisards. Guerre de Succession d'Espagne.	
1709 : famine générale ; émeutes populaires.	
1713 : traités d'Ulrecht.	
1714 : traité de Rastadt.	
Règne de Louis XV (1715-1774)	
1715 : régence de Philippe d'Orléans.	
1716 : création de la banque de Law.	
1720 : peste de Marseille.	1720 : réorganisation de la maréchaussée.
1723 : mort du Régent.	1724 : déclaration prévoyant les peines pour certaines catégories de vols.

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
1726 : Fleury ministre d'État.	1726 : édit punissant les faux-monnayeurs. 1730 : ordonnance qui précise la définition du rapt de séduction.
1733 : guerre de Succession de Pologne.	
1740 : guerre de Succession d'Autriche.	1741 : <i>Traité des matières criminelles suivant l'ordonnance d'aoust 1670, et règlements intervenus jusqu'à présent par C. du Rousseau de la Combe.</i> 1748 : <i>L'Esprit des lois</i> de Montesquieu. Suppression des galères. 1749 : édit supprimant les prévôtés (à l'exception de celle du Châtelet à Paris). Début d'installation des bagnes de Toulon et de Brest.
1748 : traités d'Aix-la-Chapelle.	
1756 : guerre de Sept Ans.	
1757 : attentat de Damiens.	1762 : <i>Instruction criminelle suivant les lois et ordonnances du royaume</i> par Muyart de Vouglans. Début de l'affaire Calas. 1765 : réhabilitation de Calas. 1766 : traduction en français du <i>Traité des délits et des peines</i> de Beccaria. Exécution du chevalier de La Barre. 1767 : création des dépôts de mendicité. Installation du bagne de Rochefort. 1768 : création du conseil souverain de Bastia. 1770 : réforme de l'organisation judiciaire et suppression de la vénalité des offices dans les parlements. 1771 : <i>Traité de la justice criminelle de France</i> de Daniel Jousse.
1765 : révolte des parlements.	
Règne de Louis XVI (1774-1792)	
1774 : Turgot, contrôleur général des finances.	1774 : abandon de la réforme de Maupeou.
1775 : émeutes de la « guerre des farines » (émeutes rurales de subsistance).	1775 : création du parlement de Nancy.
1777 : Necker directeur général des finances.	1778 : réorganisation de la maréchaussée. 1780 : déclaration royale qui supprime la question préparatoire.

ÉVÉNEMENTS POLITIQUES ET SOCIAUX	ÉVÉNEMENTS JURIDIQUES
<p>1789 : formation de l'Assemblée constituante. Prise de la Bastille. Abolition des privilèges. Déclaration des droits de l'homme et du citoyen.</p> <p>1790 : Constitution civile du clergé.</p> <p>1791 : fuite du roi à Varennes. Assemblée législative.</p> <p>1792 : arrestation du roi. Massacres de septembre. Victoire de Valmy. Révolte des Chouans.</p>	<p>1788 : réforme de Lamoignon, qui simplifie la hiérarchie des tribunaux et modifie la procédure, notamment pour la prononciation des sentences. Suppression de la sellette et de la question préalable à l'exécution.</p> <p>1789 : mise en « vacances » des parlements (3 novembre). Abolition du pilori.</p> <p>1790-1791 : lois réformant l'organisation et la procédure judiciaire.</p> <p>1791 : premier code pénal. La peine des fers remplace nommément celle des galères. Abolition de l'amende honorable.</p>
<p>I^{re} République (1793-1804)</p>	
<p>1793 : exécution de Louis XVI. Création du Comité de salut public. La Terreur.</p> <p>1794 : victoire de Fleurus.</p> <p>1795 : 1^{re} réunion du Directoire.</p>	<p>1795 : code des délits et des peines (en fait seulement code de procédure criminelle). Abolition de la peine de mort, avec une condition suspensive : le retour de la paix.</p>
<p>1796 : victoire de Napoléon Bonaparte à Arcole.</p>	<p>1796 : réorganisation des tribunaux. Ouverture du bagne de Lorient.</p> <p>1797 : ouverture du bagne du Havre.</p> <p>1798 : organisation de la gendarmerie.</p>
<p>1799 : coup d'État de Bonaparte. Début du Consulat.</p> <p>1801 : paix de Lunéville avec l'Autriche. Concordat.</p>	<p>1799-1800 : réforme judiciaire.</p> <p>1801 : création des tribunaux criminels spéciaux, successeurs des cours prévôtales. Réforme de la procédure criminelle. Annulation de la décision d'abolition de la peine de mort.</p>
<p>1802 : paix d'Amiens avec l'Angleterre. Bonaparte nommé consul à vie.</p>	<p>1802 : sénatus-consulte qui complète la réforme de 1800 (avec notamment le rétablissement du droit de grâce). Ouverture du bagne de Cherbourg.</p>